

第四十一回古民家歴史部会歴史探訪

「横浜開港150周年海防三浦半島の歴史を探る」

原本 朗 起稿

平成21年7月2日(木)(集合京急馬堀海岸駅改札前9時50分厳守)

古東海道・大和武伝説の地・走水番所跡など幕末海防を探るコース

行程；馬堀海岸駅→陸軍砲兵学校跡→大津層→馬頭観音堂→浄林寺→旧水道トンネル→走水水源地→伊勢町観音→御所が崎・走水番所跡→覚栄寺→円照寺→大泉寺→走水神社→走水地蔵→宇野邸跡→バス停「走水神社前」(15分)→馬堀海岸駅着。

IV 古東海道・大和武伝説の地・走水神社(走水・観音崎(約6.0km))

行程；馬堀海岸駅→陸軍法兵学校跡→大津層→馬頭観音堂→浄林寺→旧水道トンネル→走水水源地→伊勢町観音→御所が崎・走水番所跡→覚栄寺→円照寺→大泉寺→走水神社→走水地蔵→宇野邸跡→バス停「走水神社前」→大津駅着。

1・陸軍砲兵学校跡(校庭内に重砲発祥の地碑)

明治30年(1897)陸軍は、現、馬堀小・中学校、馬堀自然教育園の場所に重砲兵学校を設置。前身は浦賀の海軍屯所で陸軍要塞砲兵幹部練習所、要塞射撃学校など変遷し、此の地に移転。砲術の訓練と発達に寄与し、養成した将兵は3万人を超えた。戦後一時期、浦賀が引揚港となり、旧兵舎は陸軍の復員手続きや馬堀援護所として使用された。

2・大津層(路頭・逗子シルト層の上にのり貝化石を含んだ砂泥層。この様な層は海底で造られ海底から隆起)

3・馬頭観音堂(生唆像・蹄の井)

昔、上総の国から荒馬が海を泳いで渡り走水に着きました。喉が渴いた荒馬が土手を蹴ると清水が湧き出し、村人は「蹴るの井」と呼ばれ、馬堀の地名発祥の由来とされる。後、この馬は三浦氏から源頼朝に献上され、名馬・生唆(イゾギ)として宇賀川の先陣争いで活躍した話伝わる。観音像前に馬の手綱が供えられ現在も競馬の騎手が必勝祈願に訪れる。

4・浄林寺(浄土宗鎌倉光明寺末・七重山・本尊阿弥陀三尊。御胎内に承応3年1654東御寺内仏師与左衛門記・三浦地蔵尊第29番・三浦薬師第5番札所・境内地蔵様・馬頭観音、観音堂明治32年4月9日豊島村大工棟匠村田重太郎作)

創立は天正17年(1589)。開山は然蓮社廊誉上人、智的和尚と言う。馬頭観音の関わりから、馬鈴、蹄鉄奉納されている。ムクロジの名木、種は丸いので羽根つきの玉に、果皮は石鹼代用に使われた。

5・旧水道トンネル

走水トンネル・横須賀造船所フランス人技師ヴェルニー計画軍港水道、明治9年市内初めて水道管]

〔を設置の低い狭い1本の長い曲線のトンネルを、軍用道路として拡張し、明かり取りの穴を削って、現在の2本に改修した。馬堀側入口山腹に、横穴古墳がある。〕

稲荷社(玉姫稲荷・明治からの社、平成16年4月10日放火焼失)

6・走水水源地(桜の名所一般公開される)

明治9年(1876)横須賀造船所への通水が始まり、市内唯一の自己水源地。明治35年(902)完成した煉瓦造貯水池、後造られた国内初期の鉄筋コンクリート構造浄水池は国登録有形文化財。走水の湧き水豊富でおいしく腐らないと評判涸れた記録もない、水量1日2000立方m。

7・伊勢町観音(町内会館・漁民の網にかかったと言うポックリ観音信仰、約61cm寄木造り玉入り漆箔宝冠立像宋風江戸初期鎌倉仏師秀作・拝観要予約)

8・走水番所跡(寛永9年1632番所設けられ、走水奉行・向井氏管轄、奉行屋敷江戸湾海防関所、与力同心住居走水小学校辺り同心町と呼ばれた・天保14年1843川越藩江戸湾海防台場築き6挺大砲配備した幕末期旗山崎台場跡・明治19年1886陸軍低砲台設置跡松の木の下に現存)

9・御所が崎(大和武尊東征時宿所説の処、背後山に旗を立てたと伝えられ旗山崎)

10・覚栄寺(浄土宗鎌倉光明寺末・本水上道清院・本尊阿弥陀如来、三尊阿弥陀春日作)

当地は元大和武尊が東征の際、尽忠従者を弔うために十王堂を建立した跡。開基は載誉屋道で永正11年遷化(1514)。屋道上人が念仏宣布の道場を建て現寺号を称した。墓地に向井一族・政勝系統の墓、宝篋印塔、五輪塔、地蔵尊浮彫碑・木喰修行の名僧・徳本上人供養塔・

滝の井戸と言う湧水井戸等。

十王は「十王経」に説く。冥界の十王。泰広王、初江王、宋帝王、伍官王、閻魔王、變成王泰山府君、平等王、都市王、五道転輪。閻魔王は死後の世界の死者を裁く者。死者の罪を裁く王

11・円照寺（日蓮宗衣笠金谷大明寺末・東光山・本尊三宝祖師、仏、法、僧・走水沖から引き上げられた銅鐘市文化財指定奥書に元徳2年1330鐘を竜宮に奉納すると有る・経文奉納）

応永5年（1398）日海上人創建。墓地に江戸湾海防従事した会津藩士の墓6基、川越藩士の墓1基。文政5年（1822）村の漁師が海中より拾い上げた写経を封入した古鐘が伝えられる。写経は南妙法蓮華経2軸で「元徳2年庚子8月7日同8日彼岸中供養可奉納竜宮以鐘願主沙弥了性」の奥書があり、筆跡よび鐘の年代も鎌倉期を下らないと言い、鐘にも写経に対応すると思われる銘があると言う。平安期以後発達した竜神が河鐘を欲すると言う信仰に由来すると言う。吾妻鏡に建保元年（1213）12月30日の条に源実朝が自筆円覚経を三浦の海底に沈めた例があり、沈鐘伝説を照明する貴重な事例である。

12・大泉寺（曹洞宗逗子沼間海宝院末・走水山・本尊地藏菩薩室町初期作・明治維新まで鎮守走水神社の別当職）

天正年中（1573～92）の創建で、開山は靈屋伝英（海宝寺2代、寛永8年7月1631寂）開基は長谷川七郎左門長綱。天正10年（1582）徳川氏寺領2石の朱印を賜った。

13・走水神社（ハシリ・走水2-12・祭神大和武尊、その妃弟橘媛命、例祭10月15日・裏山に媛の歌碑明治43年1910・境内社諏訪社、神明社、須賀神社）

景行天皇の子大和武尊が、東征（トウエイ）伐のために立ち寄り、上総へ渡る時になると海が荒れ船は進退を失った。これは海神の怒りのためと考えた弟橘媛は、自ら荒海身を投じて怒りを鎮めた。お陰で無事に渡海できた。その時、船足が速く水が走る様だったことから、走水の地名が起ったと言う。後、尊の冠を村人が賜り、石堰に納めて御神体として建立したのが走水神社と言う。江戸時代には漁民の信仰を受けた。弟橘姫命は橘神社として別に祀られていたが、後合祀された。境内に航海安全舵碑・包丁塚（走水住民が大和武尊に料理を献上、大伴黒主材トノ加ヨシ名を賜った故事による、包丁、鳥獣魚介類の慰霊、昭和48年建立）・尊が滞在した跡御所ヶ崎、船出した皇（スメラギ）島、尊と媛が別れを惜しんだ御座島、媛の従女達が殉じ身を投じた姥島等伝説地名が残る。

浦賀水道をにらむ交通・軍事上の要地、古東海道の房総半島への渡海地とし「古事記」「日本書紀」にも登場する。江戸時代初期には、船手組の向井氏の拠点となり寛永元年（1624）より70年余り走水奉行がおかれ、江戸へ入る船を検査した。

14・走水地藏（2体江戸時代作・てら山）

15・宇野邸跡

江戸時代走水村名主宇野武左衛門屋敷跡（石垣のみ・会津藩領時）東側角に馬頭観音や太田道灌ゆかりの伝う「どうかん地藏」・公郷村名主永嶋家の赤門に対し黒門と言われた。

16・古東海道（大和武尊東征伐伝説の道・8世紀頃奈良の都から常陸国への官道は鎌倉付近から三浦半島古代走水から海を渡り房総半島へと通じていた古道）

足柄峠→国府津→三浦半島（衣笠、曹源寺、大津天神坂、安房口神社、小原台）→走水→舟→上総への道。

17・参考資料；観音崎灯台

江戸幕府は、慶応2年（1866）に、英・仏・米・蘭と締結した「改税約書」に基づき、8つの灯台建設を決定した。その中で最初に建設を開始したのが観音崎灯台。幕府滅亡後、明治政府が引継ぎ、明治元年（1868）横須賀製鉄所建設に携わっていた仏人技師ヴェルニューが建設を担当、横須賀製鉄所のレンガと石灰を使用し、四角形白塗装と仏制レンズを備えた灯台が4ヶ月後に完成し、明治2年1月1日我が国最初の洋式灯台として開設された。海拔約54m①光源は菜種油・落花生油・石油・アセチレンを使用し、光度1750カンデラであった。しかし、震災で倒壊、現在のものは1925年再建のもで、白八角形コンクリート造、海拔約56m、光源は白熱電灯で光度は14万カンデラ、光達距離は約37km、霧の発生時には20秒間隔の霧笛を鳴らす。昭和23年灯台80周年記念高浜虚子句碑「霧いかに深くとも嵐強くとも」。

